

社会福祉援助技術現場実習の独自性に関する一考察（その1）

—— 児童福祉施設における現場実習と保育実習の比較 ——

A Comparative Analysis Using Data pertaining to the Daily Duties in Social Work Practicum : Part I

板 野 和 彦

Kazuhiko Itano

1. はじめに

社会福祉援助技術現場実習は将来福祉専門職となる学生たちが初めて現場に臨む機会であり、その重要性は高い。しかし現場実習終了後の実習生の報告などの中に実習先施設、機関での内容に対する疑問がしばしば見られる。また実習受入れ先の指導担当職員からもとまどいの声が聴かれる。

この様な現状に対して今年度、全国社会福祉協議会がマニュアルの改定を行う¹⁾など、指導内容の充実に向けての取り組みがなされている。またこれまで養成校における事前・事後指導や評価などについては検討がなされてきたが、実習先施設における実習内容に関する研究はさきわめて限られている。

本研究では社会福祉援助技術現場実習のあるべき姿について考え、その独自性について考察を行いたい。

2. 研究の目的

今回は予備的研究として位置づけ、社会福祉援助技術現場実習の内容を児童福祉施設における保育実習と対比させながら以下の点を明らかにする。

1) 社会福祉援助技術現場実習の実習内容に関する現状を把握する。実習先施設で具体的にどのような実習内容がどの位（時間的な長さおよびその全体の中に占める割合）行われているのかを明確にする。

2) 社会福祉援助技術現場実習の実習内容の独自性を探求する。

将来福祉の現場で、社会福祉士としての業務を行うために必要な能力を身につけることができる内容が行われているのかどうかを検討する。特に同じ施設で行われている保育実習との比較により

社会福祉士の業務の専門性とそれを高めるための実習内容について検討する。

3. 研究の対象

養護施設で社会福祉援助技術現場実習を終了した実習生25名の実習日誌の日課の記録の部分、同様に養護施設で保育実習を行った実習生25名のものと比較し、保育実習との共通性、社会福祉援助技術現場実習の独自性などについて比較・研究を行う。

なおここで取り上げた実習生はいずれも短期大学の福祉学科、または保育学科の第二学年、19又は20歳の女子で、それぞれ社会福祉援助技術現場実習または保育実習を履修していた者である。

今回は予備的調査として対象を養護施設で実習したもの限定して行った。続いて他の児童福祉施設に関しても同様の調査を継続的に行う予定である。

4. 研究の方法

実習生たちの実習日誌の日課の記録から実習内容を（食事指導、オリエンテーション等の）事項ごとに書き出し、同時に実施した時間も分単位で記入する。そしてこれを内容の種類によって16に区分した。区分は「社会福祉施設現場実習指導マニュアル」（全国社会福祉協議会）および「保母養成専門教科目教授内容ソースブック」（厚生省児童家庭局）に示された内容を基準として行った。

○社会福祉施設の社会福祉専門職員（ソーシャルワーカー）に期待される基本的業務²⁾

①個別的な生活問題の解決援助

②各種グループ活動や行事などの計画・実施

③職員・職種間の連絡調整およびスーパービジョ

ン、社会福祉援助技術現場実習生へのスーパー
ビジョン

- ④関係機関・施設・団体との連絡調整
- ⑤家族・親族に対する援助
- ⑥ボランティアの受入れと援助
- ⑦地域社会との関係促進
- ⑧各種の社会福祉調査の計画・実施
- ⑨施設全体の管理・運営への参加
- ⑩地域の社会福祉計画や社会福祉運動への参加

○保母の果たしている役割の理解³⁾

- ①児童の身の世の世話の補佐
- ②生活がいろいろと進められていく時に保母が配慮する事項についての協力
- ③生活管理面をめぐる補佐
- ④施設内外における児童の生活訓練、学校教育、矯正、治療などのための担当保母としての配慮事項の補佐
- ⑤幼児のための集団保育が行われる施設では集団保育担当保母の助手として保育活動に従事すること
- ⑥余暇活動としての児童の集団活動に加わるなど

○区分と実習事項

- ①生活指導：食事指導、入浴指導、就寝指導、掃除指導、作業指導、幼稚園迎え、学童送り出し、朝礼、お祈り、絵本を読む、おやつ、排泄指導、手洗い、足洗い指導、投薬、食事準備及び片付け指導、洗面指導、歯磨きチェック、買い物同伴、散歩、余暇指導、自由時間、スポーツ指導、テレビ視聴等
- ②学習指導：学習への助言、夏休みの宿題指導等
- ③児童観察
- ④児童と直接関わりのない業務：掃除、窓ふき、洗濯物処理、靴を洗う、環境整備、調理手伝い、ふとん上げ、布団敷、食事準備及び片付け、敷布交換等
- ⑤集団保育担当保母の助手として保育活動に従事
- ⑥記録：日誌記入等
- ⑦ミーティング：職員打ち合わせ、職員会議傍聴、朝の会、打合せ、引継ぎ等
- ⑧オリエンテーション：園長講話、指導員講話、

先生の説明等

- ⑨スーパービジョン：フィードバック、巡回指導教員との面談、反省会（グループスーパービジョン）
- ⑩ケース会議出席
- ⑪ケース記録閲覧
- ⑫各種グループ活動や行事などの計画・実施：レクリエーション等
- ⑬関係機関等との連絡調整、地域との関わり：福祉事務所との連携、学校の授業参観、老人ホーム訪問等
- ⑭相談援助（相談業務）
- ⑮家族・親に対する援助：家族との面談等
- ⑯ボランティアの受入れと援助：ボランティアに対する説明、施設内の案内等

区分「①生活指導」は保母の果たしている役割のうち、「①児童の身の世の世話の補佐」に該当するものである。社会福祉専門職員に期待される基本的業務には該当する業務は示されていない。

区分「②学習指導」は児童が学校における学習の予習、復習または宿題等を行う際の補助である。保母の果たしている役割のうち「④施設内外における児童の生活訓練、学校教育、矯正、治療などのための担当保母としての配慮事項の補佐」に該当する。社会福祉専門職員に期待される基本的業務では該当する項目はない。

区分「③児童観察」は実習の初期に施設職員等が指導を行っている場面や児童が自由時間に遊んでいる場面などで、児童の行動の特徴を知るために、直接参加せずに観察することである。これは保母および社会福祉専門職員のどちらの内容にも含まれてはいないが、児童との関わりを基礎を成す活動として共通して重要な項目である。

区分「④児童と直接関わりのない業務」は施設で行われている業務のうち直接は児童と関わることなくしに行う業務である。したがって実習生が児童を伴わず「園長室の掃除」を行った場合はこの区分に含まれるが、児童を伴って行ったり、児童の掃除を指導・監督する場合の「居室の掃除」「清掃指導」等は区分「①生活指導」に含まれるものとした。保母の果たしている役割の「②生活がいろいろとすすめられてゆく時に保母が配慮する事

項についての協力」に該当する。社会福祉専門職員に期待される基本的業務には該当する業務は示されていない。

区分「⑤集団保育担当保母の助手として保育活動に従事」は保母の業務に含まれるものであり、社会福祉専門職員の業務には該当する項目はない。

区分「⑥記録」施設によって実習を行っている時間内に実習ノートや指定された記録用紙、計画書などの記入のための時間を設定している場合がある。これを「記録」として集計した。保母および社会福祉専門職員双方に共通した項目である。

区分「⑦ミーティング」は施設で日常的に行われている打合せや会議に実習生が参加したものである。しかし日常的に行われているものでも朝礼のように入所児童も含めて行われるものは「①生活指導」に含まれる。

区分「⑧オリエンテーション」は実習に関する事項を職員が実習生に対して説明又は指導したものを指す。

区分「⑨スーパービジョン」は施設指導員から受けるものに加えて、養成校の教員による巡回指導の際の面談、施設で行われる反省会（グループスーパービジョン）を含む。社会福祉専門職員に期待される基本的業務の「③職員・職種間の連絡調整およびスーパービジョン、社会福祉援助技術現場実習生へのスーパービジョン」に該当する。施設の実習指導担当者からスーパービジョンによって、現場実習を行っている実習生は社会福祉専門職員としての業務の方法や児童との関わり方等についての指導を受けることができる。また実習生自身が将来社会福祉専門職員として社会福祉援助技術現場実習の実習生を受入れ、スーパービジョンを行う際の基礎となる体験ができる点も見落とせない。保母の業務には含まれていない。しかし今後実習生の活動を客観化し、より内容を深めてゆくためには必要になってくるとと思われる。

区分「⑩ケース会議出席」ケース会議に出席して発言をするなどして参加すること、または傍聴すること。社会福祉専門職員の業務には含まれているが、保母の業務には含まれない。

区分「⑪ケース記録閲覧」施設によって他の名称を用いている場合もあるが、入所している児童の生活歴の記録を閲覧すること。直接閲覧できず、

職員から解説を受けた場合もこの区分に含めた。社会福祉専門職員の業務には含まれるが、保母の業務には含まれない。

区分「⑫各種グループ活動や行事などの計画・実施」は実習生または職員が計画・立案した活動に参加したことを指す。実習生自身が計画、立案した場合はもちろんであるが、職員や他の実習生が計画したものに参加する場合も含めた。事前の計画なしに自由時間などに児童と遊んだりスポーツ等を行った場合は区分「①生活指導」に含めた。

区分「⑬関係機関などとの連絡調整、地域との関わり」児童相談所や学校等との連絡調整、園祭り等を通しての地域との関わりである。社会福祉専門職員の業務には含まれるが、保母の職務には含まれない。地域との関わりを持った行事等はグループによるものであっても、区分「⑫各種グループ活動や行事などの計画・実施」ではなくこちらの区分に含めた。

「⑭相談援助」および「⑮家族親族に対する援助」は本来ならば実習生自身が入所児童の面接を行ったり、その家族からの相談を直接受けてゆくことを意味するが、ほとんどそのような場面がないことから、施設の担当者が面接等を行った際に同席し、観察による学習を行った場合も含めて集計を行った。社会福祉専門職員の業務には含まれるが、保母の職務には含まれない。

「⑯ボランティアの受け入れと援助」社会福祉専門職員の業務の中には含まれているが、保母の業務の中には示されていない。

以上の区分を行う際に、実習生たちの記録のみでは内容が明確にならない場合もあったが、これには面接による聴き取り調査を行い、正確な内容を把握した。

次にそれぞれの区分の実習時間を分単位で合計し、それらが実習全体の中で占める割合を算出した。算出した実習生一人一人の実習内容の区分ごとの割合を、現場実習を行った実習生のグループと保育実習を行った実習生のグループとに別けて平均値を求めて両者の比較を行った。

5. 結 果

「①生活指導」は現場実習では42.50%、保育実

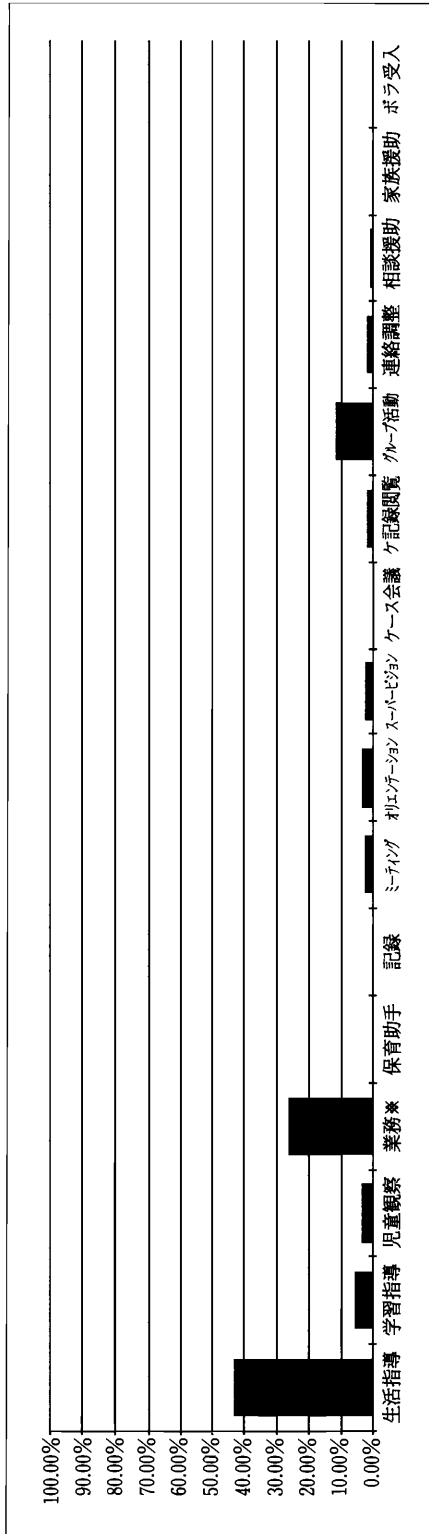


図1 社会福祉援助技術現場実習 ※項目中の「業務」は「児童に直接関係のない業務」を表す

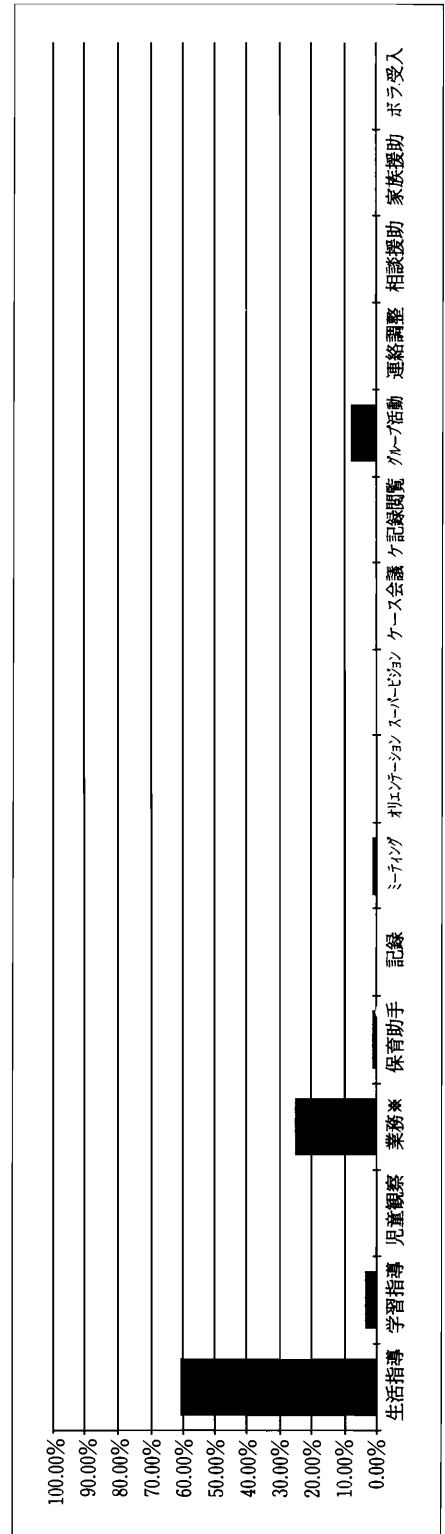


図2 保育実習 ※項目中の「業務」は「児童に直接関係のない業務」を表す

表 1

○社会福祉援助技術現場実習

日課の区分	生活指導	学習指導	児童観察	業務	保育助手	記録	ミーティング	オリエンテーション	スーパービジョン
平均時間(分)	5328	662	428	3236	0	10	294	415	291
割合	42.50%	5.28%	3.41%	25.81%	0.00%	0.08%	2.35%	3.31%	2.32%
日課の区分	ケース会議	ケ記録閲覧	グループ活動	連絡調整	相談援助	家族援助	ボランティア受入	合	計
平均時間(分)	11	181	1425	170	80	0	6	12537	
割合	0.09%	1.44%	11.37%	1.36%	0.64%	0.00%	0.05%		

○保育実習

日課の区分	生活指導	学習指導	児童観察	業務	保育助手	記録	ミーティング	オリエンテーション	スーパービジョン
平均時間(分)	4482	255	0	1852	92	15	98	15	15
割合	60.37%	3.43%	0.00%	24.95%	1.25%	0.20%	1.31%	0.20%	0.20%
日課の区分	ケース会議	ケ記録閲覧	グループ活動	連絡調整	相談援助	家族援助	ボランティア受入	合	計
平均時間(分)	0	0	578	15	0	0	8	7425	
割合	0.00%	0.00%	7.78%	0.20%	0.00%	0.00%	0.10%		

習では60.37%で保育実習での割合がかなり高い。「②学習指導」は現場実習では5.28%, 保育実習では3.43%で、その差は2%以内でありそれほど大きな違いは認められない。「③児童観察」は現場実習では3.41%, 保育実習では0%となっている。これは保育実習を行った学生が、全員この児童福祉施設での実習を行う前に保育所における保育実習と幼稚園における教育実習を終了してきており、児童との接触に抵抗感がなく、また施設側もそのように配慮した結果であると思われる。「④児童と直接関わりのない業務」は現場実習では25.81%, 保育実習では24.95%で大きな違いは認められない。「⑤集団保育担当保育士の助手として保育活動に従事」は現場実習では0%, 保育実習では1.25%で保育実習のみで行われていた。「⑥記録」は現場実習では0.08%, 保育実習では0.20%で大きな違いは認められない。「⑦ミーティング」現場実習では2.35%, 保育実習では1.31%で現場実習における割合が高い。記録によると保育実習の場合職員がミーティングを行っている間に実習生が児童と遊んでいる例が多いようであった。「⑧オリエンテーション」は現場実習では3.31%, 保育実習では0.20%で現場実習において占める割合が高い。「⑨スーパービジョン」は現場実習では2.32%, 保育実習では0.20%で現場実習で占める割合が高い。保育実習ではほとんどの場合、実習の最後の実習反省会(グループスーパービジョン)のみを行っているようである。「⑩ケース会議出席」は現場実習では0.09%, 保育実習では0.00%でいずれも非常に少ない。「⑪ケース記録閲覧」は現場実習では1.44%で181分, 保育実習では0.00%で保育実習では全く行われていないのに対して、現場実習では十分な時間とはいえに行われている。「⑫各種グループ活動や行事などの計画・実施」は現場実習では11.37%, 保育実習では7.78%とやや現場実習のほうが割合が高いものの、どちらも高い割合を示している。「⑬関係機関等との連絡調整、地域との関わり」は現場実習では1.36%, 保育実習では0.20%で現場実習がやや高い割合になっているもののいずれも少ない。「⑭相談援助活動」は現場実習では0.64%, 保育実習では0.00%で保育実習では皆無、現場実習でも非常に少ない。「⑮家族・親族に対する援助」は両方とも0.00%であっ

た。「⑯ボランティアの受入れと援助」は現場実習では0.05%, 保育実習では0.10%で、社会福祉専門職員に期待される業務であるにもかかわらず保育実習での割合が高かった。しかしその差は0.05%と非常にわずかで、むしろどちらでもほとんど行われていないという見方が正しいと思われる。

現場実習と保育実習の日課の区分の割合は非常に似ており実習の内容に大きな差異がないことが分かる。ゆえに社会福祉士の職務内容を反映した独自性の高い実習が行われているとは言いがたい。

区分のなかで「⑨スーパービジョン」「⑩ケース会議出席」「⑪ケース記録閲覧」「⑬関係機関・施設・団体との連絡調整」「⑭相談援助」「⑮家族親族に対する援助」「⑯ボランティアの受入れと援助」は社会福祉士に期待される職務であるが保育士の職務には含まれない。よって社会福祉士の実習において特徴的な実習事項となるべきものであると言える。しかしこれらの項目の比率はどれも低い。

但し、スーパービジョンが実施された時間が平均で291分であり、1週間あたり72分になり非常に短時間であるとは言いがたい。しかしこれを個別に見てゆくと60分以上実施した施設が数ケース含まれていたために平均値が高くなったものである。このような事実を考慮するならば「スーパービジョンは多くの施設で平均的に、十分な時間とは言えないが行われている。」と考えるよりも「いくつかの施設では十分に行われているが、多くの施設ではまだまだ不十分である。」と考えるほうが正しいように思われる。

6. 考 察

独自性を持った現場実習が行われていないことについて、実習生の持つ問題、受入れ施設側の問題、養成校の持つ問題という3つの観点から考察を加える。

(1) 実習生の問題点

実習生の実習の捉え方、取り組み方によってより内容を深めることができる。例えば今回の調査では生活指導の中に含めた自由時間中の児童とのふれあいの際も、児童の行動や言動に注意を払うことにより、社会福祉援助技術の学習として活用

することができるのではないかと。現に自由時間の中で指導員の助言やスーパービジョンを得ながら児童に対する相談援助的なアプローチを行った事例も見出された⁴⁾。

実習を行う当事者としての実習生の取り組みによって、より独自性のある実習への可能性は見出すことができる。しかし全てを解決することは不可能である。

（2）養成校の問題点

1) 事前指導が不十分、テーマが不明確である。：個別指導による実習テーマの決定や指導を行っているが、結果的には各施設の実情に合わせてゆく配慮が十分にできているとはいえない。そのため実習生が現場の実情に適合した実習を展開することが困難になっているケースが見られた。

2) 施設の現場の意見を聴く機会が少ない；現場実習の前後に主に書類の郵送という形で養成校の意図している実習の内容などを伝えるようにしているが、このような形では双方向のコミュニケーションとはなりにくい。各施設の実習担当者との打合せも年に1回が限度であり、また打合せを行っても、すべての施設が参加することは不可能である。施設との意思疎通が困難であるため施設との話合いの結果を実習指導に反映してゆくこともまた困難である。

3) 巡回指導の問題点；巡回指導は各施設一回づつであり、時間も限られている。そのため施設側と十分な話合い行うことも困難であるし、実習指導担当者が不在の場合もある。また施設長や指導主任などの対応を受けて、現場での実習生の学習内容が明確にならない場合もある。

（3）施設の問題点

今回の50ケースでは実習内容の独自性が十分に見られなかった。内容の再検討を必要としている。

1) 施設の社会福祉援助技術現場実習に対する意識が低い；現場実習を行う実習生の実習内容についての検討が十分になされていない。施設によっては実習を開始する時点で、保母のものと同じ内容を実習させる旨を告げるところもある。

2) 実習指導担当者が十分な時間を確保できない；現場の実習指導担当者は日々の業務をこなし

ながら指導を行っている。そのため日常的な処遇に関する実習生への指導や、スーパーヴィジョン等のための時間を設定することが難しい。また実習生がアドバイスを求めようとしても、他の諸業務や休暇などで担当者が不在である場合も見られるので、そのような場合には別な職員に指導を依頼しておく等の二段構えでの指導が望まれる。

現実的には困難であるが、実習指導専属の職員が配置されればこの問題は解決する。

3) 実習指導担当者の専門性の問題；社会福祉士の資格取得に焦点を当てた実習であるにもかかわらず実習指導担当者が無資格者である場合も多く見られた。他の職種とは異なる技術や概念を含む実習であり、今後はやはり有資格者による指導が望ましいと思われる。

7. 課 題

今回の調査で明らかになった点を踏まえて、学内で行っている現場実習の事前指導、事後指導、さらには巡回指導の際の指導内容に関しても検討を加えてゆきたい。

また現場実習と保育実習の日課の傾向には大きな差異が見られなかったが、これは初めての实習に際して、先ず施設に慣れることから始めるために生じた結果であるという見方もできる。実習生が初めて児童福祉施設で実習をするために、先ず入所児童とのふれあいを持つために「生活指導」を中心に行ったり、施設の機能を理解するために「児童と直接関わりのない業務」を行うことによって、施設という環境に慣れる期間が必要であり、現段階ではそのために4週間の実習期間が費やされているのだという見方も成立するかもしれない。しかしこのように考えるならば実習の期間をより長く設定する必要性が生ずる。

今回の調査の中で実習生たちの実習に対する意識が高まることによって実習内容が深まるということが確認された。事前指導において実習生の意識が高まり、主体的に取り組めるような指導を行うことが望まれる。また養成校の指導教員が現場の現実、実情の把握に努め、施設との意思疎通をはかりながら指導を行うことの重要性が強く感じられた。

注

1) 1996年7月15日に日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会の編集による「新社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル」が出版された。この新しいマニュアルの中で、従来のものと比べて改められた部分もあるが、「現場実習」の基本的達成課題に関しては、以下に示すように大きな変化は見られない。

社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル（従来のもの）

【実習前の課題】

- ①学生は実習の意義、目的を理解し、実習に対する意欲を持つようにする。
- ②学生はスーパービジョンの意義と実習指導体制を理解する。
- ③学生は自己の選択した実習分野と施設について基本的な知識を持つ。
- ④学生が自分でとくに達成したい実習の課題、研究テーマなどを明確にする。
- ⑤実習する現場で必要とされる実践技能を理解し、基本的な演習を行う。

【実習中の課題】

- ①利用者（クライアント）を理解し、ニーズを把握する能力を強める。
- ②利用者（クライアント）や関係者（家族・親族・友人等）の援助関係を作る能力を強める。
- ③利用者（クライアント）や関係者（家族・親族・友人等）の問題解決能力を高めるように援助する能力を強める。
- ④施設・機関・団体等の職員やボランティアとの人間関係を形成する能力を強める。
- ⑤社会福祉従事者としての職業倫理、施設・機関・団体の運営や職員の就業などに関する規定を学び、組織の一員として仕事を計画し、責任を果たす能力を強める。
- ⑥コミュニティの中の施設・機関・団体としての理解を深め、具体的なコミュニティへの働きかけについて学び、その援助のための能力を強める。
- ⑦社会福祉専門職業人のあるべき姿と必要な能力を実際に学び、自己を客観視し、解決すべき自己の課題について明確化し、理解を深める。

新社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル（1996年7月15日）

- ①社会福祉実践の価値観と職業倫理の関係の理解。価値の実現に関する具体的理解。
- ②利用者自身とその問題ないしニーズを諸システムとの関係で分析評価し援助計画を立てる技術。
- ③援助過程を通して必要な専門的援助関係を作り結び深める技術。
- ④利用者とその関係者（家族、親族、友人等）の問題解決能力を高め、利用者と社会環境との調整をはかる技術。

⑤小集団を形成し、また小集団のニーズや性質を評価する技術。

⑥集団過程を促進しプログラム活動を展開する技術。

⑦地域社会・入所施設等の特性を評価し、その組織化を促進する技術。

⑧当該領域において用いられる社会資源の知識とそれを開発し活用する技術。

⑨当該機関・施設の目的・機能、利用者システム全体を理解し関係専門職その他との連携をはかる能力。

⑩観察および記録作成の技術

⑪自分の価値観、行動、意識の特色に気づき、自己理解を深めること。

2) 日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会編「社会福祉施設現場実習指導マニュアル」全国社会福祉協議会、1993、P15

3) 厚生省児童家庭局編「保母養成専門教科目教授内容ソースブック」財団法人日本児童福祉協会、1972、P68

4) 事例

A 養護施設で実習を行った実習生Bの日誌より

「今日もMと一緒に刺繍をしているときに『死にたい』とか『永遠に眠りたい、人生に疲れた』と突然言われたので私は『刺繍を一生懸命やっていっぱい疲れたら』と冗談ばく言って刺繍の方に集中させました。Mはその後は忘れたように一生懸命針を動かしていました。Mは保母さんになりたいとか、子どもが好きとか言っているのので私には本当は『死にたい』とか言っているのでも心の底からの言葉には思えないのですが、どのように感じているのでしょうか。」

（実習指導担当職員の答え）『私たちの目から見てもMがBさんに心を開いている様子がわかります。『死にたい、永遠に眠りたい』というのは言葉通りの意味ではなく子供たちがさみしいのだというサインを私たちに送っていると見るができます。非常に重要な言葉ですのしっかりと受け止めてあげてください。』

これは、自由時間の間に、実習生が無自覚的にケースワークを行った事例である。実習日誌の記録に記された答えから、実習指導担当者は援助として捉えている様子がうかがわれる。このような状況を実習生が意識して活用することによって、今回の調査では「①生活指導」の区分に入れた自由時間も相談援助の学習として現場実習の重要な学習の機会と位置づけることができる。そしてこの事例からも分かるように、施設の入所児童は、実習生に対して、年齢に近い、継続的に自分の上に立つ人間ではないと感じている、などの条件から自分の本心を吐露することがある。今回の調査で集めた記録の中にも頻りに上記のケースと同様に、実習生に対してなので口にしたのかもしれない、と思われる児童の発言が見られた。ラポールの形成という観点から見れば実習生であるということが有利に働いていると見る事が可能である。